

# 有馬氏の領国支配

外山 幹 夫

## The Government of the Arimas in their Territory.

Mikio TOYAMA

はしがき

肥前の有馬氏に関する研究は、これまで決して多いとはいえない。それは根本的には史料が乏しいこと、さらには学界の関心がさして向けられなかったなどの理由が挙げられよう。

だが、これまで全く研究が行なわれなかったわけではない。古く戦時中、佐藤春夫氏が文学者の立場から『有馬晴信』<sup>1</sup>を著し、また戦後まもなく、林銑吉氏が、『島原半島史』<sup>2</sup>上で有馬氏について触れている<sup>3</sup>。さらに近年、野村義文氏が『キリシタン大名有馬晴信』<sup>4</sup>を著し、長野暹氏が有馬氏の動きを簡潔に概説している<sup>4</sup>。

有馬氏に関する外人史料については、早く村上直次郎氏<sup>5</sup>、また近年、柳谷武夫氏<sup>6</sup>、松田毅一各氏等<sup>7</sup>によって翻訳されて、研究が容易になって来た。一方、国内史料として、近年私が発見した福田文書<sup>8</sup>に有馬氏関係のものが幾らかあり、検討に裨益することとなった。

こうした事情のもと、私は有馬氏に関し幾つかの研究を行なってきた。まず有馬氏の出自に関して、江戸時代初期以来展開されてきたと思われる藤原純友末孫説を否定し、在地出身者であ

ることを論じた。また鎌倉時代にあつては、高来郡の一角、島原半島の南部を中心に地頭領主制を進めていたこと<sup>9</sup>。そして、南北朝時代には、主として南朝方として活動したこと。また戦国時代初頭の明応三年、有馬貴純は少式政資を支援し、同氏がその肥前西部の松浦党諸氏を屈服させ、平戸の松浦弘定を降すのに貢献し、政資から、恩賞として肥前白石・長島両庄の所領を与えられたことが、以後における同氏の戦国大名としての発展の契機となったらしいことを指摘した<sup>10</sup>。

次いで戦国時代に関しては、天文七年当時有馬晴純（法名仙岩・仙巖）が肥前守護職の地位にあつたことを『大館常興日記』<sup>11</sup>によって明らかにした。さらに福田文書の分析から、戦国大名大村純忠領に対し、有馬氏の宗主権が浸透していたこと。これを大村氏側からいえば、大村氏は有馬氏の傀儡であつたことを明らかにした。このことと関連して、彼杵郡内に有馬氏は關所を設け、また一部の地域に代官を配置して支配していたこと。しかし、彼杵郡の掌握は決して十分とはいえなかったことなどを明らかにした<sup>12</sup>。小稿はこれに引続き、その後明らかにすることのできた二、三の点について論述することとする。

# 一、領国支配の体制

## 1 中枢部

### ア 安富越中入道徳円

戦国大名を補佐し、その権力体制を構成する重要な役割りを果たす者として、年寄・宿老・老臣などと称される集団のあることは周知の事実である。

有馬氏に関して、こうした機能を果たした者が居たことは確実であるが、その関係史料は乏しい。その間にあって、安富徳円は比較的史料に恵まれている。まず、その人物を見てみよう。

彼は、有馬氏領高来郡安徳城主安徳上野介純徳の兄弟であった。<sup>12</sup> 安徳氏は、恐らくは鎌倉時代の地頭の系譜をもつ国人領主であると思われる。安富徳円は、もと僧籍にあって後に還俗したものであった。<sup>13</sup> 徳円（得円とも書く）とは恐らくは法名であろう。ただし、その名乗は不明である。有馬義貞（初名義直）及び、義純・晴信三代に仕えた。義貞の治世時に受洗し、教名をジョアンと称した。<sup>14</sup> ルイス・フロイスは彼をジョアン左兵衛尉、次いでジョアン越中殿と記した。<sup>15</sup> 官途が左兵衛尉から越中守に転じたことによるものであろう。

有馬氏との血縁上の位置について、ルイス・フロイスは、有馬義貞の「義兄弟、すなわち妻の兄弟」<sup>16</sup> であるとしている。しかし、降った寛政年間の『寛政重修諸家譜』は、有馬義貞の室は安富越中入道徳円の娘であるとして、相違する。<sup>17</sup> 外人宣教師の記録であるが、同時代史料という点からすれば、前者に従うべきかと思われる。有馬晴信にとって、徳円が「伯叔父」<sup>18</sup> であるとルイス・フロイスが記すのとも符合している。彼の妻は、かつて尼僧であったが、キリスト教に改宗し、ジェロニマ

という教名を得ていた。ルイス・フロイスは、彼女を「高貴な婦人」<sup>19</sup> であるとし、さらに、「当高来では殿の奥方に次ぐもっとも主要な婦人」<sup>20</sup> であるとしている。

安富徳円の人柄について、ルイス・フロイスは、「賢明で博識の人物」<sup>21</sup> であるとして評価している。その居処は、有馬氏の日之江城の城下にはなく、数キロ隔った有家にあった。<sup>22</sup>

安富徳円が、有馬氏領国ではたした機能をみてみよう。これについて、天正十二月二月、佐賀の竜造寺隆信が有馬晴信の攻撃を開始したときのこと、有馬氏領では不安と動揺が広まった。その間にあって、晴信の祖父晴純をはじめ、彼の「伯叔父」たちまでも「卑劣さと臆病は目にあまるものがあり、彼等は一体となって竜造寺側に寝返り、（有馬）殿に対して蜂起し、その城を包囲する始末であった」<sup>23</sup>、「かくて殿の友人、親戚までが殿の大敵となった中に」、「安富徳円だけが、「父や兄弟たちの敵となり、甥（晴信―外山）の味方として断乎として踏み留まった」という。

このことは、有馬氏を支援した島津軍の部将上井寛兼の日記によっても裏付けられる。そもそも、有馬氏が島津氏に支援を求め、これに接近を開始したのは天正十年十一月初旬のことであった。同日記、天正十年十一月七日程に、

有馬殿頃御味方に被参候間、温泉山の御告にもやと頼母敷存合候

と、これを歓迎したのであった。そこで島津氏側は、同十七日に有馬氏支援の為、有馬氏の拠る有馬に渡海することを決定する。これに対し、有馬氏は同十九日、嶋原肥後守・峯左近将監の両者を以てその祝言のため島津氏の下に派遣し、迎船を多く送るとの意を伝えた。越えて十二月一日、島津軍は有馬の地へ向けて渡海

した。しかし、翌二日島津義弘・同家久・同忠長・伊集院忠棟・鎌田政景・新納久饒・上井寛兼ら、島津軍の首脳が談合した時、件の安富徳円のことを話題に上った。その際、

深江・安徳之事、輒可被責破在所候歟、雖然安富左兵衛尉色々障候て申候故、無其儀候乎、殊可属当手之由堅左兵衛被申候へ共、于今無之之通風聞候、笑止迄候、必定其分候ハ、左兵衛之事腹をも被切せ候事歟、又ハ何と様にも計略被成、此方へ参候ハ、其節爰元へ召留、一途御暖有度候、但其元兵儀次第肝要候、

とある。安富徳円の実兄である安徳城主安徳純俊らは竜造寺氏側についたがため、島津軍はこれを簡単に攻略しようかと考慮していたものの、血縁上の理由によるのか、徳円がこれに難色を示したため、島津軍としては拱手していたのである。しかし、肝心の徳円自身は一向に島津軍の下へ出頭しなかった。島津氏側ではや、困惑し、若し来陣した折には、彼に切腹を命じるべきか等の強硬論が出た。ともかく、少なくともその身柄を拘束することとは致さねばということとなったのである。事実、その後、肥後八代の島津軍の下に赴いた徳円は身柄を拘束されることとなった。<sup>24</sup>すでに有馬晴信の実弟新八郎が島津軍の人質になっていたが、彼もまたそれに類する扱いを受けたのである。彼は頻りに帰国を求めた。<sup>25</sup>島津義弘はその対応について諮り、いったん帰国を許可することとなった。しかし、二日後の十二月二十三日、これは覆され、是非共拘束を続けるべしとの決定がなされた。<sup>26</sup>島津氏下への拘留はかなりの期間に及んだらしい。

その後、文禄三年に入り、キリシタンに対する圧迫が徐々に強まって来た。有馬晴信は宣教師等をその領内に匿ったが、そのため彼が知行を改易されることのないよう、工作する必要があった。

その時のこと、

有馬の教会と修道院、およびその他の（イエズス会員の）駐在所にある家屋や教会が失われずに済んだのは、領内の統治を司る、有馬殿の伯叔父ジョアン越中殿の優れた賢慮と工作と深い用心が与って大いに力があつた。（彼は）教会の前方に家屋を建てて（教会が）隠れるようにしたほか、有馬全土に厳しい警戒網を敷き、海からであろうと陸からであろうと余所者が現われるとすぐ判るようにし、司祭たちに急報し警戒するようにと連絡した。（中略）さらにまたかの家老（ジョアン越中殿）が彼らを鄭重にもてなし、彼らの感情を把握するのに不思議なばかりの手腕の持主で、最後には自分の思いどおりに対処するので、役人たちもまた知らぬふりをして見逃していた。役人たちは土地に不案内なので、かの家老が案内人を付けたが、その案内人たちはよく教えこまれていたから、司祭たちが決して役人と出会うことのないように（彼らを）導いた。<sup>28</sup>

さて、ここにもみる安富徳円の地位というものは、有馬氏の下にあって、その優れた才能と、有馬氏に対する強い忠誠心に裏付けられ、その領国を有馬氏に代って動かす、島津氏との折衝にあたっても、有馬氏側を代表する立場にあつたということが出来る。これには有馬氏が佐賀の竜造寺隆信の攻撃にさらされようとした時、晴信の親族、左兵衛の同僚らが皆、晴信から離反した間にあって、彼一人のみが、晴信の側に踏み止まっていたというありかたからしても、以後において、彼の地位が一層高まったであろうことが推定されよう。

では、彼の地位は何であろうか。この点について、右の史料は、

これを「家老」<sup>30)</sup>としている。しかし、これは翻訳にあたられた松田毅一氏が充てられた訳語である。そこでこれを、わが国側の史料によって、考察を進めよう。

# イ 老職

さて右の点に関し、これを示す同時代史料は遺憾ながら見出すことができない。そこでやむを得ず、降った近世大名有馬氏の下で編纂された『国乗遺文』三に眼を転ずると、ここに「国老」という項が設けられており、その中に安富越中守徳円が記されている。すなわち、

義貞公御代

安富越中入道徳円 公ノ御外戚、義純公及晴信公ノ外祖父、其先不詳、

御先代ヨリ大夫タリ、此時職ヲ辞ス、人トナリ材力アリ、子孫代々老職タリ、(以下略)

とする。これによれば、彼は義貞の先代晴純時代から大夫であった。そして義貞の時代に入ってこれを辞した。その後、その子孫が「老職」を世襲したという。安富徳円が晴信当時、有馬氏の家臣として晴信を補佐し、重要な役割りをはたしたことは先に見た通りであって、それが何の役にも就くことがなく行なわれたとは考えられない。ではその役は何であったかとなると、結局、それは大夫というより、その子孫が世襲したとされる老職そのものであったとみるべきではあるまいか。

ルイス・フロイスは、有馬晴純が「土黒エイキュウ」という「貴人」を、日本布教長コスメ・デ・トルレス宛の書状と伝言を携えさせて遣わしたとしている<sup>31)</sup>。こうした重要な任務に当たったことからして、有馬氏下の要職にあったことを示している。この人物は、高来郡土黒を本居とする者であると見られるが、この土黒

氏に関し、『国乗遺文』三は、土黒淡路守を挙げ、これが老職であるとする。

『国乗遺文』三は、古賀城主山田兵部少輔の父、山田主計頭が、戦国初期の貴純・純鑑の時代に、老職であったとする。有馬氏の勢力拡充が、貴純の時代であった情況に照応するもので、蓋然性に富むものであるといえよう。

なお同書は、早くも南北朝期の澄世の時代に、有間彦七郎澄明という者が、澄世の命を受け、「士将」として、矢上城攻撃にあたったことを記している。近世大名の下の家老は、軍編成においては侍大将となる<sup>32)</sup>。ここに記す「士将」とはこの侍大将に相当するものであろう。ではこの段階で老職が設けられていたのかとなると確証を得ない。しかし、この有間澄明が、そうした老職の先蹤としての機能をはたしていたことは十分考えられる。

次に、戦国大名有馬氏の下での老職であった者は他にいるのだろうか。この点、同じく『国乗遺文』三は、先に述べたように「国老」<sup>33)</sup>の項を設け、その中にこれに該当する人物を挙げている。そして、このうちの幾人かの者を老職であると記している。有馬氏の領国中において、主要な家臣が「国老」とされ、このうちの限られた者が老職であると思われる。

まず晴純の時代については記されておらず、その子義貞の時代に関し、谷川弾正左衛門、久能武蔵守賢治、本田出雲守、堀斎宮純政、及び先述した土黒淡路守を挙げている。

次いで義純時代は記されておらず、晴信の時代に西玄蕃、鷹屋七之丞純次が記されている。

さて、ここに挙げられている人物が老職であることが確実であるのか、また逆に、これ以外に老職は存在しないのか、記述に洩

れた者はいないのかについて問題がないわけではない。安富徳円の如き、晴信の下で重要な役割りを果しており、恐らくは老職であったと思われるに拘わらず、その記述がないなどの点を考慮せねばならぬものがある。

ともあれ、これら老職とされる者の有馬氏との血縁上の位置、その他の関係について、さきの安富徳円の場合、有馬義貞の妻の兄弟であることを既に指摘した。『国乗遺文』三の記すところによると、まず山田主計頭は、有馬経澄の子島原純尚の孫である。また谷川弾正左衛門は有馬経澄の末弟谷川越前守の七代の孫である。さらに堀斎宮純政は、さきの谷川氏の兄弟に堀氏があり、その子孫であるとされる。久能賢治のみは有馬氏とは血縁がなく、貴純時代からその先祖の与八郎が家臣となったものという。西玄蕃、鷹屋純次の兩人についても有馬氏の一門ではないとする。これによれば、戦国初期では有馬氏一門が、戦国後期になると、有馬氏一門外の者が老職となっているものが数を増しているように思われる。

ただ、戦国大名有馬氏の下で、先にみた安富徳円以外に有馬氏を十分に支え、その権力体制を構成した老職が史料上認められない。まして、その老職としての活動の実態を示す史料は皆無にひとしい。他の有力な戦国大名の場合、老職（宿老・年寄）による奉書（遵行状）があるが、有馬氏に関して、これらは認めることができない。

この点に関し、安富徳円以外の者が、竜造寺隆信による有馬氏攻撃の前に、有馬晴信から離反してしまったことをルイス・フロイスの記述から既に指摘した。これを裏付けるように、『国乗遺文』三によれば、これら多くの老臣が、有馬氏と十分な信頼関係がなく、しばしば有馬氏から追討されたことを記している。すな

わち、まず、有間澄明の末孫は、これは降った江戸初期寛永十三年のことではあるが、家内十四人が「故アツテ」「誅ニ伏シ家断絶」したとある。また安富徳円の末孫も、江戸初期寛文七年二月、「罪ニ坐シテ家断絶」したとする。これらは共に江戸時代の事ではあるが、それは戦国時代以来の厳しい有馬氏の家風の如き感がある。谷川弾正左衛門の後、谷川純之、同純奔の兄弟は、共に「罪アツテ断絶ス」とされ、また久能賢治の子純能もまた「故アツテ断絶」とされる。

老職以外にあっても、例えば千々石氏の場合、千々石淡路の後、直員がその後を嗣いだが、晴信の代、「君慮ニ叶ハスシテ断絶」という。有馬氏において主従関係が不安定であること、そのため中枢部が十分な権力体制を構成し、展開できなかったことが認められる。

## 2 地方

### ア 直轄地

次に有馬氏の地域支配について見てみたい。この点について、まず、有馬氏の膝下である有馬の地に関して、ルイス・フロイスは、有馬の地では東殿という一人の身分の高い貴人である代官が統治していた。彼は仏僧たちと深い姻戚関係にあり、年老い、はなはだ信望のある人であったので、義貞に大いに重んぜられていた。<sup>35</sup>という。またさらに、

有馬の最高位の代官の一人である西殿がそうで、彼は三百人を連れて来た。<sup>36</sup>

としている。これによれば、有馬の地には、東殿、西殿といわれる二人の代官がいて統治にあたっていた。この有馬の地は、有馬氏の本拠であったところからして、有馬氏の直轄地であったとみ

られる。この有馬氏の直轄地の代官として、東殿・西殿といわれる二人の代官がいたというのである。東殿・西殿というのは、名字というより、恐らく所管区域の東西の区分によるものであろう。その地位は、「身分の高い貴人」であり、「有馬の最上位の代官」であり、「信望のある人」であり、また有馬義貞から「大いに重んぜられて」いた。西殿の場合、「三百人」の部下を直ちに動員できる立場にあったということが分る。ところが、肝心の任務内容については記述されたものがない。有馬氏家臣の日野江城々下である有馬の地への集住はさして進行してはならず、それほど多くの家臣がこの地に居住していたとは思われない。だが、ともかく有馬氏膝下の有馬の地の管理者であったことには相違なく、その面からの実務に当たっていたものであろう。

有馬以外の地で、有馬氏の直轄地とみられるのは、有家、口之津、加津佐、及び一時的ではあるが千々石の各村である。

まず有家村について、ルイス・フロイスは、「有馬から半里少々離れた有家の地には、高来のもっとも重要で高貴な人たちが住んでいる。そこには（その一人として有馬）殿の伯叔父、すなわち殿の母の兄弟にあたるジョアンと称する家老が居を構えている」<sup>38</sup>、また「有家は有馬から一里距たり、多くの貴人や身分の高い人たちが住んでいるところである」<sup>39</sup>とする。多くの有力な家臣が群居していることは、単一領主の知行地ではないことを示している。またルイス・フロイスは、「殿は有家に向かつて旅立った。そこは有馬から一里離れた大きい集落で、そこに殿は保養のための湯治場と庭園を有した」<sup>40</sup>としている。有馬氏が湯治場と庭園を有し、気軽に赴くところは、家臣の給地ではあり得ない。さらにこの地には、教会の他、修道院<sup>41</sup>、修練院<sup>42</sup>、司祭館<sup>43</sup>、コレジヨ<sup>44</sup>、セミナリ

ヨも一時建てられていた。そして「主要なキリシタン宗団」<sup>45</sup>がいた。これらは、有馬氏の直轄地であったことを前提とするものであろう。もはや、有馬氏の直轄地であることは疑問の余地がない。ではこれを管轄するものは何者であろうか。この点に關し、ルイス・フロイスは、有家について、「その地の代官であるジョアン」<sup>46</sup>としている。先述した老職の安富徳円が、一方において、代官として、その任についていたのである。しかも、彼はこの地に住んでいたのである。代官が任ぜられている点において、有馬の地と符合する。

次に口之津村についてみてみよう。いうまでもなく有馬氏の領国にあって、ポルトガルの定航船が来港した重要な貿易港である。有馬氏がこの港湾を有する地を直轄地としたことは明らかである。天正七年当時、この村には二百戸以上の家があり、「村をあげてキリシタン」<sup>47</sup>があふれていたという。また「口之津の港はキリシタンたちのもの（そこには四百五十人ばかりが（住んでいた））」<sup>48</sup>だから、伴天連殿がそこに行つてよく、そして予が敵に勝利を得て（戻つて来る）まで伴天連殿がその地に留まつておるがよい。（下略）と有馬晴純は宣教師に述べている。これらは、この地が有馬氏の直轄地であることを前提とするものでなければならぬ。有馬晴純は天正八年、伯叔父や従兄弟、及び多くの家臣を伴つてこの地に赴き、そして受洗したのであった。口之津村は、有馬氏領国でも、最も改宗率の高いところとなった。そして、「ただ一人の異教徒もそこに留まらないまでになった」<sup>49</sup>という。そのため、迫害を逃れてこの地に来る者も少なからずいたらしい。たとえば島原純茂の迫害を受けたキリシタンが、口之津に逃れようとした。ところが嵐のため古賀氏領に漂着した。島原氏は古賀氏にその人

返しを求めた。しかし、古賀氏は人道上の観点から、自らは仏教徒であつたに拘わらず、これを口之津村に送つた。これに関し、島原純茂は有馬晴純に対し、これらキリシタンを口之津村に置かぬよう懇願した。これに対し、晴純は、彼の意を幾分いれて、天草の地に送つたという。<sup>54</sup> 有馬氏の直轄地であつたとする根拠を補強するものである。しかし、その代官は不明である。

次に加津佐村についてみよう。ルイス・フロイスは、「加津佐の地を管理する貴人」<sup>55</sup>がいたとする。この地が家臣の知行地ではなく、有馬氏の代官の管理する直轄地であつたことを示すものである。そのため、一時期、この地にも「学院と神学校」<sup>56</sup>が置かれたのであつた。

この他、千々石村も一時期直轄地とされた。元來、この地は千々石氏の本拠である。しかし、有馬晴信は、ドン・エステワンとの教名をもつこの地の領主であつた弟が没した後、一時、「古くからの（キリシタン）であるアチリアン」<sup>57</sup>という者をこの代官としたとする。また晴信自身、千々石城に住み、軍事を司つたというのをもそれを示している。

右にみるように、有馬氏の領国においては、有馬氏の本拠とする日之江城の城下である有馬の地が直轄地とされるが、老職安富徳円以下主要な家臣はこの城下に集住せず、むしろ多くは他の直轄地の有家に住んでいた。この他、口之津村、加津佐村など重要港町が、そして家臣が没した後、一時的にそれが直轄地に編入されるなどが行なわれている。<sup>58</sup>

#### イ 交通

有馬氏が、その征服地である彼杵郡に關所を設けていたこと、それによつて、該地から徴税等を行なっていることをかつて指摘

した。ここでは、有馬氏の領国支配の一環として、その交通体制について触れておくこととしたい。これに関する史料は決して恵まれてはいない。

しかし、戦国時代の有馬氏の領国内には宿場が設けられ、そこに馬が配備されて所用に応じていたことが分る。すなわち、宣教師ガスバル・コエリヨが、その卒去を控え、有馬晴信に別れを告げ、幾つかの依頼をしたいと考え、有馬氏に來ることを願つた。これを聞いた晴信は、直ちに邸を出て、「宿場の馬を乗り継いで、折からの悪路のために泥まみれになつて到着した」<sup>59</sup>という。道路自体は決して良好ではないが、「馬を乗り継ぐ」ことの出来る宿場が、主要な道路に幾つか設営されていたことが分る。

## 二、家臣の統制

### ア 島原純茂・純豊

戦国大名有馬氏は、すでに述べたように、戦国初期までの間に肥前国高来郡南部（島原半島）を掌握し、ついで同郡北部、藤津郡、杵島郡を収め、さらに彼杵郡、松浦郡に圧力を加える状況にあつた。これを支配の段階、ないしは精粗をみるとすれば、高来郡東南部（島原半島）こそが有馬氏の本国であり、これ以外の地が征服地というべきものであつた。この観点からして、有馬氏の下で厚遇され、老職その他の要職に就くのは、右の高来郡東南部（島原半島）出身者であつて、これ以外の地の出身者はむしろ、抑圧される傾向にあつたことは、その基本的な姿として認めざるを得ない。ルイス・フロイスは、有馬氏の領国において、「同国のもつとも身分の高い殿のうちの二人」<sup>60</sup>として、島原純茂と西郷純堯の両名をあげている。もちろん、これ以外にも、先述した安

富徳田、谷川弾正左衛、土黒淡路守、本田出雲守、鷹屋純次、西玄蕃、久能賢治、堀斎宮純政等の老職があつたことはいうまでもない。ところが、島原純茂・西郷純堯の二人は、右にみるように、有馬氏領国にあって、「もつとも身分の高い殿」ではあるが、「殿に次ぐ要職」である老職ではなかったらしい。それは、ルイス・フロイスの『日本史』の中で、兩人、及びその父子に関する記述は少なくないが、老職を思わせる記述がないことがそれを示している。つまり、「身分の高い殿」が、直ちに老職という状況にはなっていない。有馬氏の場合、この老職が、また軍事指揮官である「士将」とも必らずしも一致しないのであるが、島原、西郷両氏は、老職とはならなかったが、「士将」となることはあつたらしい。老職は必らずしも大領主ではなく、有馬氏の下にあつて有能、かつ誠実な領主でなければならぬ。これに対して島原・西郷両氏は大領主であり、対外戦争に際しては、彼等のもつ多くの家臣を中核とし軍編成をさせる便宜があつて「士将」とされるが、平時にあつて有馬氏の補佐、或いはその諮問に應ずるべき老職としては不適とみなされたものであろう。

島原の領主島原純豊の父が島原純茂である。純茂の妻は安富徳田の女であり、かつ有馬義貞の妻の妹である。<sup>63</sup>「有馬の国主、ならびにその近親で島原の城と市の殿である島原殿」というのはそれを示している。

有馬氏の家臣は、その領内をどのように統治していたのであろうか。この点について、ルイス・フロイスは、

これらの殿たちは、そのすべての領地に家令、管理人、もしくは収入役に相当するような一人の官吏、もしくは長官を有しており、(日本語ではこれを)役人という。それは「役職を持つ

人」という意味である。<sup>65</sup>

として、それぞれの知行地に、徴税その他にあたる役人のいたことを指摘する。当然のことである。有馬氏の直轄地にあつては、それが代官であつたこと先述した通りである。この点について、島原氏の膝下である島原の地に、別当という役の者があつた。この別当に関し、ルイス・フロイスは、

島原には当時、刑部殿という人がいたが、仏僧の並々ならぬ親友であり、偶像崇拜にいと熱中し、したがってキリシタンの大敵であつた。<sup>66</sup>

とする。別当の任務内容等について触れるところなく、単にキリスト教との関係から見ているのみであるが、島原氏のこの別当に対する扱いが峻厳を極めたものであつたことについて、ルイス・フロイスは次の様に述べる。

すなわち、島原駐在の修道士アイレス・サンチェスを追放して間もない頃、彼は出陣することとなつた。その時、彼は、何か重大で、かつ愚かな失態を演じたため、馬の綱で両手を後方で縛られ、その場で首を斬られた。<sup>67</sup>

という。島原氏膝下の島原の町に、別当があつた事實は、その後近世にまで継承された。<sup>68</sup>

先に述べたように、島原氏(純茂)は老職ではなかったが、軍事指揮にあたる「士将」であつた。すなわち、彼は有馬晴純の命によつて、西郷純堯と共に、多久城の防衛のため軍を率いて赴かせられている。

ところが、のちこの多久城は竜造寺隆信の攻撃によつて陥された。そのため、彼は西郷純堯と共に平戸に逃れた。<sup>69</sup>しかし、その後、西郷純堯が有馬氏に叛いた時、島原純茂は、西郷氏がまず自



分に対して攻撃するのではないかと恐れた。<sup>(76)</sup> この時、両者間は緊迫したのである。

ところで、島原純茂は一時期キリスト教には距離を置いたが、純茂の迫害を逃れようとしたキリシタンが、島原から口之津村に赴こうとした。ところが嵐のため、その乗船は古賀氏の所領に漂着した。島原氏は彼等の人返しを古賀氏に求めた。これに対し、古賀氏は仏教徒であったが、自分に保護を求めて来た者を、確実な死が待受けているところに引渡しすることは出来ないとして、これを安全な口之津村に送り届けた。数年後、古賀氏はキリスト教に入信した。純茂の没後、後を嗣いだ嫡子島原純豊は、古賀氏を暗殺した。これに対して、有馬氏は、島原氏を何ら処罰することとはなかったようである。

古賀氏が、キリシタンを有馬晴純の直轄地である口之津村に送り、晴純もまたこれを受入れたことを苦々しく思った島原純茂は、このことが自分にとって不面目である故、彼等をそこに留め置かぬ様、人を介して懇請した。これに対し、有馬氏は全盛期にあったに拘わらず、晴純は日本布教長コスメ・デ・トルレスの気持を害さぬよう、また一方、島原氏が新たな紛争を惹起することを恐れた。そこでその中間の道を選んだ。すなわち、口之津村に逃れたキリシタンの妻女と家族は口之津村に留まり、男達は天草志岐の島に、問題解決まで五十日間、留まらせることとした。<sup>(77)</sup> 島原氏に対する戦国大名有馬氏の姿勢を示すものであろう。

#### イ 西郷純堯・信尚

次に西郷純堯についてみてみたい。西郷氏は高来郡西郷を本貫とするが、南北朝期以降、伊佐早村に移住し、戦国時代には高城に拠って、<sup>(78)</sup> 有馬氏の家臣として、伊佐早の地を中心に活動してい

た。島原氏同様、有馬氏の城下である有馬の地に館を構え、日常有馬氏の下に出仕する状況には遠いものがあつた。そのため、ルイス・フロイスは純堯のことを「伊佐早(殿)」と呼んだ。そして彼が熱心な仏教徒で、一向にキリスト教に接近しないところから、彼を嫌悪した。<sup>(79)</sup>

西郷氏は有馬氏と血縁関係にあつた。有馬氏は、領国内外の領主との間に、極めて多くの血縁関係を生み出していた。当時の領主のありかたとして、こうした通婚がよく行なわれたことは周知のところであるが、有馬氏の場合、これが殊に著しい。有馬晴純の子が、それぞれ大村(純忠)、千々石(直昌)、松浦(盛)、志岐(諸経)各氏に入嗣している。これらは領国外の領主を、有馬氏の影響下に置こうとする意図によるものであることはいうまでもない。この他、領国内の家臣との間にも通婚している。先述した安富・安徳・島原各氏がその例である。ここにみる西郷氏も例外ではなかった。

そもそも西郷純堯の父西郷純久自身、有馬晴純の実弟であつて、西郷尚善の養子として西郷家に入嗣したものである。そして西郷純堯の妻は有馬義貞の女、または姉であり、極めて近い血縁関係にあつたのである。なおちなみに、純堯の妹は大村純忠の妻であり、また弟は深堀氏に入嗣していた(深堀純賢)。<sup>(80)</sup>

こうしたところから、純堯は島原純茂と共に、先述のように、有馬氏領国下にあつて、「もつとも身分の高い殿のうちの二人」であつた。そして老職ではなかったが、軍事指揮権を時に与えられ、島原純茂と共に、竜造寺隆信の攻撃に対処すべく、多久城守備に赴かせられたこともある。しかし、彼はしばしば有馬氏に叛いた。と同時に、キリシタン大名である大村純忠領を制圧する目

的から、純忠の暗殺を図り、しかもその謀議に、有馬義貞をも加担させようとした。これは驚ろくべき陰謀であるが、純堯は、「義貞が自分に反抗し得ないことを知っていたので、彼と協議するところがあった。なぜなら彼は義貞を一家臣のように全く掌握していたからである」としている。

それは、有馬義貞の湯治中の小浜に純忠を招き、その帰途、高城に純忠を誘い込み、暗殺しようとした。ところが、純忠を憐れに思い出した義貞が、純堯の陰謀を純忠に知らせたので、彼は危うく難を免かれたという。

また西郷純堯は、驚ろくべきことに、一時期自らの子を有馬義貞の養子としてその相続者とし、一方、義貞の子晴信を自分の養子としていた。ところがこの理不尽ともいふべき措置に対し、不満を抱いた晴信が動き出したところから、この措置は解消されたという。

さらに、有馬義貞がキリシタンになろうとした時、義貞は「女婿」である西郷純堯が熱心な仏教徒で、キリシタンに対して敵意を抱いている点を考慮して、改宗を躊躇した。もしこれが事実なら、有馬義貞は西郷純堯を単に無視できぬばかりか、むしろその意に迎合させしていると見ねばならない。戦国大名有馬義貞としては、その血縁関係があるとはいえ、到底西郷純堯をその意のままに統制することのできる事情にはなかったのである。

ルイス・フロイスは、西郷氏について、さらに次の様に記す。つねに彼は有馬・大村両家の敵で、そうした理由から下のキリシタンの敵でもあり、現にその通りである。(従来我らの同僚たちは)しばしば伊佐早領に片足でも踏み入れることができはしまいかと試みたが、堅く門戸を閉ざしているので決して成功

しはしなかった。

としている。これが決して単にルイス・フロイスの偏見でないことについては、他にも裏付けがある。すなわち、日本巡察師アレシヤンドロ・ワリニャーノもまた、その著書の中で、

この地方の領主は、ドン・プロタジオ有馬殿と称し、前述のようにドン・バルトロメの甥にあたる。両者の地は、彼等の親族で異教徒であり、伊佐早の国衆である一領主の土地によつて隔てられている。彼は常に前記二領主、及び我等の聖なる信仰の大敵であった。したがって、一方から他方へは海路によらなければ安全に行くことができない。

としている。ここにもるように、有馬義貞、及びその子晴信と西郷純堯とは、信仰の相違も加わって緊張、対立関係にあり、決して緊密、かつ安定的主従関係にあったのではなかったのである。西郷氏の知行地である伊佐早の地に対し、宣教師等は全く立入ることは出来ず、またこの間、有馬氏は、その解禁を命じうる状況にはなく、あたかもそれは有馬氏の家臣というより、むしろ半独立の状況といふべきものであった。有馬氏が西郷氏の知行地に対し、その私領はもちろん、給地からの徴税も殆んど不可能だったのではあるまいか。それでも有馬氏の全盛の晴純段階では、既にみたように多久への出陣の命を出し、現に出陣しているが、以後の義貞、義純、晴信段階では殆んどこうした命は貫徹できなかったとみられる。従つて天正十二年初頭、竜造寺隆信の攻撃を目前にした時、西郷信尚が有馬晴信に叛き、隆信方に属したのはむしろ当然の選択であつて、その徴証はすでにみたように、早くから認められたことであつた。

この西郷氏以下の有馬晴信の有力家臣、及び晴信の近親一族の

者が、天正十二年における隆信の攻撃の前に、晴信に叛き、隆信方に属した。そして最後まで晴信方に留まったのは、老職の安富徳円のみであったということは、晴信とその家臣間の主従関係の深さが、およそどの程度のものであったかを窺わせるものであるといわねばならない。

有馬氏の家臣中、最大の領主であったとみられる西郷氏のこうした半独立的な行動は何に支えられたものであろうか。この点についてみてみたい。この点に關し、佐賀の竜造寺隆信が天正期に入って急速に台頭し、周辺の領主から異心なき旨の起請文を徴している。これについて、最も早期のものは天正三年五月六日付松浦隆信・鎮信父子のものである。ついで大村純忠（天正四年六月十一日）、そして降った天正七年六月一日付有馬晴信（当時鎮純）の竜造寺鎮賢（隆信の嫡子）宛<sup>85</sup>のものが認められる。これより先の天正五年十月十四日・同十七日付の西郷氏一族のものが認められる。それは一部を除いて大半は各人個々に提出している。しかもその中に、西郷氏の嫡流で家督の位置にあった西郷純賢の子純尚（信尚）のものが含まれていない。西郷氏一族のものは、この両日にわたって八通、計十一名の者が提出しており、竜造寺氏に対する周辺領主の起請文において、一族の者でこれほど多くの者が名を登場させるのは他に例がない。これは何を意味するものであろうか。

これは、それほど起請文を求められるほどに竜造寺氏から西郷氏が警戒される領主であるということ。そして一族が一括連署して提出するようなまとまりが西郷氏一族になかったらしいことを窺わせる。なお天正五年十月十九日<sup>86</sup>には、東純盛が同様起請文を提出しているが、これは西郷氏の重臣の一人かと思われる。

ところが、天正十二年三月、竜造寺隆信の戦死後の同年十月十六日、西郷氏一族等十四名の者が、新たに隆信の重臣鍋島信生（直茂）宛に起請文を提出している。ところがここでは西郷幸明・同幸勝・同幸忠以下の西郷氏一族の他、原純英・宇良尚保・金崎種定・遠岳堯運・井崎綱通、その他、高来郡北部の領主もまた全て一括連署して提出している<sup>88</sup>。天正五年の竜造寺隆信の活躍時代にあつては、先述のように、西郷氏は、一族個々に起請文を提出しているが、隆信没後の天正十二年十月段階では、当時他の多く領主の起請文が隆信の嫡子政家（鎮賢の改名）宛に提出されているのに対し、早くも竜造寺氏の重臣で実力を蓄わえつつあった鍋島信生に提出している程に政治的变化に彼等は敏感である。それと共に、この際起請文に先述の様に、佐賀に近い高来郡北部の遠岳・井崎各氏が連署に加わっているのは注目し値する。すなわち、西郷氏一族の結束が緊密となり、高来郡北部を含め、周辺領主を被官化することに成功しているらしいことを窺わせている。

なお『西郷記』には、西郷氏の「家老」として山崎丹後守・東伯耆守・原田兵部を、そして『西郷責実録』は他に小川左京を記している。このうち東氏に關しては、先述の様に天正五年十月十九日に起請文を記した東氏（純盛）があり、血縁関係の者であることを窺わせる。さらに『西郷記』は「村々相廻り」を行なう「代官」に、蒲原四郎左衛門、野田帯刀、円城寺左太郎を記す。この他、「所務方役」に北嶋左京を挙げている。ただその職務内容については記すところがない。『西郷記』は、西郷氏の持城として、高城（番代蒲池弥十郎）・正林城（番代香田兵庫）・茶臼山城（番代喜多安心）・宇喜城（番代木下安可）を挙げ、それぞれに城番を記している。しかし、史料価値に問題があり、鵜呑みに

することができず、遺憾である。何れにせよ有馬氏領国下最大の家臣であるとみられる西郷氏自体についてみると、有馬氏から半独立の動向が認められるものの、内部的には、殊に竜造寺隆信活動期においては必ずしも一族の結合は緊密とはいえず、有馬氏と同様、その領主としての限界を示すものであったといわねばならない。

### 三、有馬氏とキリスト教

#### 1 有馬氏三代の連署状

有馬氏が戦国大名化したのは、貴純の明応年間のことであるとみられる。そして同氏の全盛期を現出したのが晴純である。高来郡以外への領国の拡大があり、それと共に肥前守護職の獲得、足利將軍の相伴衆就任などがみられた。その後、天文二十一年嫡子義貞（初名義直）が家督を嗣ぐと、徐々に竜造寺氏の圧迫によって所領を狭める。そして嫡子義純が元龜元年家督を嗣ぐが、彼はその翌年病没する。そのため、義純の弟晴信（初名鎮純、のち純貴・久賢・正純を経て晴信）が元龜二年に家督となる。この晴信の時、戦国大名から近世大名化を進めるが、岡本大八事件によって慶長十七年、悲劇的死を迎えたことは周知の通りである。

このうち、まず義純について右にみるように、その家督としての在位期間が一年程度であったところから、イエズス会の宣教師は、彼の家督としての言動について全く無視している。しかし、この点、「福田文書」<sup>①</sup>に八通に上る福田左京亮宛有馬義純の領国支配に関する書状写が認められることによって、家督であったことは疑問の余地がない。

なお有馬氏に関しては、同じく「福田文書」に、何れも無年号

文書であるが、(a)有馬仙岩（晴純）・同義直連署状写一通、(b)有馬仙岩・同義直・同義純連署状写八通、(c)有馬義直・同義純連署状写五通が認められる。九州地方にあって、親子二代にわたる連署状については、他に大友義鎮・同義統連署状がある。しかし、親子連署状の他、親子孫三代にわたる連署状は、有馬氏以外、寡聞にして他にその例を知らない。ところで(a)は天文二十一年に晴純が家督を義直に譲与すると共に、出家入道して以後、永祿九年二月に没する間のもので、義直治世段階のものである。(b)は前二者に新たに義純が加わった連署状で、これも(a)の期間と一致するが、義純が成長した(a)よりの時期より少し後の年代のものであろう。そして、これもまた義直治世段階のものである。(c)は仙岩の没した永祿九年二月以後、義純の没する元龜二年までの間のものである。義直・義純二人のうち、何れの治世段階か断定することはできないが、治世期間の長さや、(b)の例からして、これも義直治世段階の可能性が高い。それによれば、有馬晴純（当時仙岩）は、家督を嫡子義貞（当時義直）に譲与した後も治世に関わり、実権を振っていた。また一方、義直はその嫡子義純を家督以前から領国支配の実務にあたらせていたということが出来る。これに関し、

柄本弓箭小城之手仕、并、至諫早粉骨之次第、度々之打廻り、  
軍勞事、向後不可有忘却也、<sup>（原）</sup>倍可抽至勇之状、如件、

永祿八年六月二日 義純 御判<sup>②</sup>

馬場忠左衛門殿

として、義純がその家督以前、しかも、祖父晴純の現存中、早くもこうした領国支配に関する書状を馬場左衛門に宛てて発していることがこれを裏付けている。このことは何を意味するものであ

ろうか。親子、或いは親子孫三代の者の連署状が認められることをもって、彼等の関係が密接なものであったと理解することが、単純かつ皮相なものに過ぎないことは明らかである。

## 2 キリスト教をめぐる緊張

有馬氏がキリスト教と関係をもつのは永禄六年、大村純忠の受洗直後のことである。義貞の治世であつて、彼は貿易の利を考慮し、領内に入部した修道士ルイス・デ・アルメイダに好意を示し、直轄地口之津の住民に対し、キリスト教の説教を聴くことを命じ、日本布教長コスメ・デ・トルレスに対しても、領国内での布教を許可した。これには義貞の父晴純も同様で、好意を示した。ところが、やがて布教に伴う内紛が生じると、晴純の態度は一変する。そしてその結果、晴純は一時期嫡子義直を領外に追放すると共に、家督の地位につき、治世を復活した。これについては、ことの性格上、有馬氏を初めとする日本側史料には一切記述されたものが認められない。しかし、イエズス会修道士アルメイダの書簡、フロイスの『日本史』は、共にそのことを記している。アルメイダの書簡によると、義貞のキリスト教接近に対し、領内で家臣が謀叛し、それを無視できなくなったためであるとする。その時期は、アルメイダの書簡からして、永禄七年九月以前のことである。その追放先が何処であつたのか、また何年続いたのかは不明である。また大村純忠が、有馬氏の領国内で仏教徒達が、仏僧の示唆によつてキリシタンに対して侮辱していることを知り、一人の人物を口之津に遣わし、仏僧の背後にある張本人を探らせたところ、それは意外にも父晴純であることが判明し、純忠が驚いたとする。ここにみるように、有馬晴純は当初キリスト教に好意を寄せるが、領内家臣の反発をみるや、家督の地位にあつた義貞を追放し、

治世を復活した。このことは、一時的に事態を收拾したとしても、有馬氏自体の権威を失墜することは明らかであつて、長期的観点からして好ましくないものであることは明らかである。

さらに晴信の場合、当初キリスト教に対し好意を寄せず、父義貞の葬儀を仏式で行ない、十字架を倒壊させ、教会を焼却させる等の行為を行なう。しかし、後年、キリスト教会からの支援を期待し、竜造寺隆信の圧迫が強まる中で、叔父大村純忠の軍事的援助を求める必要が生じると、態度を一変させ、父義貞に遅れること四年、天正八年に父と同じ口之津の地で受洗する。そして領内で受洗四カ月後までのうちに神社四十以上を破壊し、全領民に改宗を求めた。これには仏僧達といえども例外とせず、これを拒否する者には領外への退去を命じた。

以上みる如き有馬氏四代の間のキリスト教をめぐる断絶、及び一貫せぬ方策は、領国支配に対してマイナスとして作用したことには明らかである。

## あとがき

戦国大名有馬氏の領国支配について、これまで、領国支配の体制、及びその家臣統制、及び有馬氏四代とキリスト教との関係の三点から、誠に乏しい史料を駆使しつつこれを検討した。

それによると、まず、戦国初期からは老職と称される中枢機関が設置され、数名の者がその地位にあつた。しかし、彼等是有馬氏を十分に補佐する機能を果しておらず、僅かに戦国末に安富徳田等、極めて限られた者しか任務をはたしていない。

次にその直轄地は、有馬氏の本居たる日之江城のある有馬村の他、口之津・加津佐両港湾所在地、及び有家村、そして一時期、

千々石村に設置されていることが確認される。要するにそれは島原半島南部に大半集中している。そして城下町への家臣の集住は殆んど認められず、多くの家臣は領内各地に割拠したままであった。直轄地には有馬氏の代官が配置されているが、家臣の知行地には、島原氏下の島原の町に別当が支配に任ずる等、種々の状況があったらしい。

また家臣中、最大の領主は島原・西郷両氏であった。この両氏は老職に就くことはなかった。彼等は時として有馬氏に叛くが、有馬氏は何らこれを処罰することができなかった。ことに西郷氏は有馬氏から半独立の様相を示すものであった。

次に戦国期の有馬氏四代をみると、キリスト教への対応をめぐって四代間にそれぞれ微妙な態度の相違が認められる。のみならず一個の人物にあっても晴純、晴信の如き、前後態度の相違が認められる。また晴純が、息子で家督の地位にあった義貞を一時期領外に追放する等のことがあり、戦国大名としての同氏の權威を墜すと同時に、領内の家臣統制を弱め、一般領民を困惑、混乱させる結果となっているといわねばならない。

# 〔注〕

- (1) 佐藤春夫氏『有馬晴信』昭和十八年。三田文学出版部。
- (2) 林銑吉氏『島原半島史』上、昭和二十九年。長崎県南高来郡市教育会。
- (3) 野村義文氏『キリシタン大名有馬晴信』昭和五十七年。新波書房。
- (4) 長野暹氏『有馬氏』(『日本の名族』十二) 平成元年。新人物往来社。
- (5) 村上直治郎氏訳『耶蘇会士日本通信』上・下、昭和二年、同三年。駿南社。その他。
- (6) 柳谷武夫氏訳『日本史』一―五。昭和三十八年―五十二年。平凡社。

- (7) 松田毅一・川崎桃太両氏訳『日本史』一―二。昭和五十二年、昭和五十三年。中央公論社。同『十六、七世紀イエズス会日本報告集』第一期第一巻―第三期第七巻。昭和六十二年―平成六年。同朋社。同『日本巡察記』昭和四十八年。平凡社。
- (8) 外山幹夫『中世九州社会史の研究』昭和六十一年。吉川弘文館に所収。
- (9) 外山幹夫『肥前国高来郡深江村地頭安富氏をめぐる二・三の問題』昭和四十五年。長崎談叢四九輯。
- (10) 外山幹夫『少式氏の衰滅過程』『佐賀藩の総合研究』昭和五十六年。吉川弘文館。
- (11) 外山幹夫『大村氏の領国支配』『中世九州社会史の研究』昭和六十一年。吉川弘文館。
- (12) フロイス、松田他訳、前掲書十巻、三四七ページ。
- (13) 同前十巻、三三三ページ。
- (14) 同前十巻、一四八ページ。
- (15) 同前十二巻、二二五ページ、その他。
- (16) 同前十巻、三三三ページ。
- (17) これらの点については同前十巻、四二ページ。松田氏注に詳しい。
- (18) (19) (22) 同前十巻、二二一―二二三ページ。
- (20) 同前十一巻、一一三ページ。
- (21) 同前十巻、三三三ページ。
- (22) 同前十巻、一四八ページ。
- (23) 同前十巻、一四八ページ。
- (24) 『上井寛兼日記』上。天正十年十二月二十三日条。同二一九日条。
- (25) 同前。天正十年十二月六日条。
- (26) 同前。天正十年十二月二十一日条。
- (27) 同前。天正十年十二月二十三日条。
- (28) 同前。天正十年十二月二十九日条。
- (29) フロイス、松田他訳、前掲書十二巻、二二五ページ。

(30) 同前十一卷、二〇三ページ。

(31) 同前九卷、四四ページ。

(32) たとえば、近世大村藩にあって、家老針尾九左衛門は、一方において協備左侍大将であった(『新撰士系録。針尾氏項』)。

(33) 国老が老職とは区別されるものであったことについて、新しく有馬氏の家臣となった佐賀の御墓野長能について、『国乗遺文』三は国老とは記すが、老職であるとはしていない。新しく家臣化した者が、いきなり老職となる筈はなかった。

なお一方、『藤原有馬世譜』は、安德・山田・堀・鬼塚各氏について、これを老臣としている。さらにまた『北肥戦誌』巻二九、三九四ページ(青潮社本)にも、有馬氏の下に老臣のあったことを記し、これに木崎市右衛門という人物が就いていたとする。老臣については、戦国大名大村氏の下にもこの職名のものがあつた(外山「大村氏の領国支配」前掲)。老職と老臣は音が近い。音が近ければ、いわゆる宛字を用いることが多かったことを思えば、両方の職名が用いられていたのではあるまいか。事実、豊後の大友氏の下にあっては、年寄・宿老・老中の他、新たに義鑑・義鎮・義統の時代では、加判・連判等の多様な称呼が用いられた(外山「大名領国形成過程の研究」五七〇ページ)。

(34) 外山、同前書。二六九ページ。大友氏にあっては親繁が家督であつた文安年間、即ち十五世紀中期から年寄が整備した。

(35) フロイス、松田他訳、前掲書十卷、三五ページ。

(36) 同前十卷、四七ページ。

(37) ここに松田氏が「代官」という訳語を宛てている。日本側史料で「代官」について裏付けるものがないが、これは先の「家老」とさるものと異り、受入れられよう。

(38) フロイス、松田他訳、前掲書十卷、一三二ページ。

(39) 同前十二卷、一七八ページ。

(40) 同前十卷、三九ページ。

(41) 同前十卷、一六八ページ。

(42) 同前十卷、二九〇ページ。

(43) 同前十一卷、一七〇ページ。

(44) 同前十一卷、一七八ページ。

(45) 同前十一卷、二二〇・三二〇ページ。

(46) 片岡弥吉氏「イエズス会教育機関の移動と遺跡」『キリシタン研究』十一輯。

(47) フロイス、松田他訳、前掲書十卷、二八九ページ。

(48) 同前十一卷、三二九ページ。

(49) 同前十卷、一三六ページ。

(50) 同前九卷、一一六ページ。

(51) 同前九卷、一五四ページ。

(52) 同前十卷、一四四ページ。

(53) 同前九卷、一六一ページ。

(54) 同前九卷、一五七ページ。

(55) 同前十一卷、三二四ページ。

(56) 同前十二卷、八五ページ。

(57) 同前十一卷、三三四ページ。

(58) 同前十卷、五三ページ。

(59) この他、彼杵郡の浦上村を天正十二年、有馬晴信がイエズス会に寄進したが、これも有馬氏の直轄地であつた前提によるであろう。

(60) フロイス、松田他訳、前掲書十一卷、三九五ページ。

(61) 同前九卷、一一二ページ。

(62) 同前十卷、三三九ページ。

(63) 入江清氏『島原の歴史』藩制編。三ページ。またフロイス、松田他訳、前掲書九卷、四九ページには「有馬殿の義父にあたる島原殿」とみえる。

- (64) フロイス、松田他訳、前掲書九卷、四四ページ。
  - (65) (66) 同前九卷、八三ページ。
  - (67) 同前九卷、八四ページ。
  - (68) 入江渾氏著前掲書、一一ページ。
  - (69) フロイス、松田他訳、前掲書九卷、一二二ページ。
  - (70) 同前九卷、一五五ページ。
  - (71) (72) 同前九卷、一五九ページ。
  - (73) 外山・高島忠平編『日本城郭大系』17、一四七・一七四ページ。
  - (74) フロイス、松田他訳、前掲書九卷、一五五・三六二ページ、その他。
  - (75) 同前九卷、三六三ページ。フロイスによると、西郷純堯は「下の殿たちのうちでは、武術とか勇敢さにおいてはなく、悪賢さ、謀略、欺瞞において第一人者であった」としている。
  - (76) (78) 外山『大村純忠』一三三ページ。
  - (77) 西郷純堯と有馬氏との血縁関係について、フロイス、松田他訳、前掲書十卷、三七ページでは、彼が有馬義貞の女婿であったとする。一方同五一ページでは、「純堯は義直（義貞）の義兄弟にあたり」として相違する。また西郷信尚について「伊佐早は異教徒の殿で、ドン・プロタジオ（有馬晴信）の姉妹の息子、（すなわち）彼の甥にあたり」（フロイス、松田他訳、前掲書十一卷、一二六ページ。）とする。
- また義直（義貞）の姉が別人の伊佐早殿に嫁していたとする見解もある（前掲書十卷、四三ページ解説）。
- (79) フロイス、松田他訳、前掲書九卷、三六三ページ。
  - (80) 同前九卷、三六四ページ。
  - (81) 同前十卷、五三ページ。
  - (82) 同前十卷、三六・三七ページ。
  - (83) 同前十一卷、一二六ページ。
  - (84) アレシヤンドロ・ワリニャーノ著、松田毅一他訳『日本巡察記』

- (平凡社版) 三七ページ。
  - (85) (87) 竜造寺文書『佐賀県史料集成』三卷。
  - (86) 同前。ここには、西郷幸光・同幸勝、西郷宗浦・同幸武・同幸信がそれぞれ連署している他、同純賢・同幸教・同純安・同堯繁・同貞徳（以上、天正五年十月十四日）、同幸忠（同十月十七日）が、各々個別に提出している。
  - (89) 『藤原有馬世譜』一、『国乗遺文』一。なお晴純は初名賢純であって、將軍足利義晴から偏諱を与えられ、晴純と改名したのである。
  - (90) 『藤原有馬世譜』一・二、『国乗遺文』一・二。
  - (91) (92) 福田文書『中世九州社会史の研究』。
  - (93) 外山幹夫『大名領国形成過程の研究』七一〇ページ。
  - (94) 『国乗遺文』六。
  - (95) フロイス、松田他訳、前掲書九卷、四四ページ。
  - (96) フロイス、松田他訳、前掲書九卷、一一八ページ。『イエズス会士日本通信』上、四一―四二二ページ。
  - (97) フロイス、松田他訳、前掲書九卷、一六三ページ。
  - (98) 同前十卷、六二―六五ページ。
  - (99) 同前十卷、一五五ページ。
  - (100) 同前十卷、一六五・一六六ページ。
- 〔補注〕有馬氏に関する研究として、次のものを追加する。  
結城了悟『キリシタンになった大名』昭和六十一年。キリシタン文化研究会。